

小さいのち 雑学

空のふかみに 雲があり

光のなかに ほほえむ
あなた

巻頭の詩 「よろこび」の詩である

美しい詩だなあと考えた。私はこう
さらに、この詩集のページを操っていくうちに、この詩の生まれてくる原点の深さを感じるのであった。
それは、北海の深く深く、しかも、澄みきったものの底からうまれてきたものであることを知ったのである。
みずかみかずよさんは2回の大手術で、生死の間をさまよいながら、長い入院生活をつづけた。その折りの「たとえば」という詩の一節に

あたたかい
あなたの手のひらは
たとえば.....

なんと
大きな愛でしょう

というのがある。
かずよさんのご主人は、長い病院生活の妻に対して、毎日毎日、かかさずに見舞いにくるのだ。
妻を喜ばす工夫をしては.....この夫へささげる詩である。
孫があるという、夫婦の強い愛情である。清潔で、しかも、深い深いつながりである。
こうした、現代にはめずらしいというべき、清らかで、深い愛を背景として生まれたのが、あの巻頭の詩である。
こういう二人を考えて味わうと、あの巻頭の詩は、あたたかく・美しく清潔なものが、こぼれるようにはみだしてくるのである。
また、詩の世界から、二度ももどってきた人の詩集らしく、命の素晴らしさが、ほろほろとこぼれだしてくるような詩もちりばめられている。

1886年11月

椋 鳩十氏 「何と清潔に美しく光る心ぞ」より 児童文学作家

【彼岸花】

[学名:Lycoris radiata Herb.]



ヒガンバナ科の多年草。マンジュシャゲ(曼珠沙華)、シビトバナ(死人花)ともいう。鱗茎(りんけい)は広卵形で径5~6センチメートル、黒褐色の外皮がある。葉は線形で長さ30~50センチメートル、幅6~8ミリメートル、花茎が枯れたあとに出て越冬し、翌春に枯れる。秋の彼岸(ひがん)のころに高さ30~50センチメートルの花茎を出し、散状に緋紅(ひこう)色花を5、6個横向きに開く。花被(かひ)裂片は倒披針(とうひしん)形で長さ約4センチメートル、幅5~6ミリメートル、強く反転し、基部に鱗片状の副花冠がある。雄しべ、雌しべともに花被裂片よりはるかに長く、弓状に上向きに曲がる。寺院の境内や墓地をはじめ、土手や田の畦(あぜ)など人里に生え、東北地方南部から沖縄に広く分布するが、いずれも三倍体で果実ができない。中国には二倍体のシナヒガンバナがあり、これは結実する。シナヒガンバナとショウキズイセンの雑種がシロバナヒガンバナで、園芸上でリコリスとよばれている。

名前にかかわる話

彼岸花の名は秋の彼岸ごろから開花することに由来する。別の説には、これを食べた後は「彼岸(死)」しかない、というものもある。上記の飢餓植物としての面から一考する価値はあると思われる。別名の曼珠沙華は、法華経などの仏典に由来する。また、「天上の花」という意味も持っており、相反するものがある(仏教の経典より)。仏教でいう曼珠沙華は「白くやわらかな花」であり、ヒガンバナの外観とは似ても似つかぬものである(近縁種ナツズイセンの花は白い)。『万葉集』にみえる「いちしの花」を彼岸花とする説もある。「路のべの吉師の花の灼然く人皆知りぬ我が恋妻は」(11・2480)また、毒を抜いて非常食としている事もあるので、悲願の花と言う意味もあるが一般的には危険である。